

今月の谷口雅春先生のお言葉

# わが子は 善 であるのが本当のすがたです

子供のことに取越苦勞をしてはならない

多くの母親は子供のことをあまりに取越苦勞するため、却って子供に悪思念を放送して子供の健康や運命を害している。或る母親は一瞬間でも自分の眼の前にいと心配でたまらないのである。彼は自分の想像の中で、躓いて転んでいる自分の子供の姿を思い浮べる。自動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。水に陥って溺れかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。世の母親よ、何故あなたはこの反対をして

はいけないのか。こんな取越苦勞が起るのは、子供を神の子だと思わないで人間の子だと思うからである。神の子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと思うものは終世、取越苦勞をして育てねばならぬ。子供を神の子だと思うものは、子供を尊敬して出来るだけその世話をさせては頂くが、神が守って貰うと信ずるが故に取越苦勞は必要はないのである。人間力で子供を生かし得ると思うなら終日終夜起きて子供の番をしておれ。それは出来なからう。出来ない間に子供を生かしているのは神の力である。

(新編『生命の實相』第22巻2頁)

## 子供には本来善ばかりの実相がある

人間には仮かりの相すがたと本当の相すがたとがあるのです。仮かりの相すがたというのは(中略)、親が心で縛しばっているのとそれに反抗するために、あるいは操行そうこうがわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影はんえいとして出てくる、これが仮かりの相すがたでありまして、本来その子の操行がわるいのも学業の成績が悪いのもないのであります。人間の本来の相すがた、本当の相すがたは神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相じつぞう、その本当の相すがたを見て、それを拝み出すようにしますと——拝むといっても、あなたがち掌てを合わさなくてもむろんよいのですけれども——心で子供を拝む——「うちの子供は本当に神の子であって立派な子である。放っておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で拝むのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30卷39〜40頁〕

## 子供を善くするには言葉の力が大切

今までの教育家のやっておられる教育法をみますと、たいていは人間のわるいところを見つけまして、それを「ここがわるいから直せ」というふうなことを常に言ってきたのであります。そうして「お前はできがわるいからよく勉強せよ」こういうような調子で教えてきたのであります。そうするとその子供はどういうふうになってゆくかといえますと、「お前ができがわるいから」とこう言われると、言葉の力によりまして、「自分はできがわるい」ということを強く強く心の底に印象させられるのであります。そうして「できがわるいからやれ、やれ」と言われますと、「わたしはできがわるいのだ、やらなくちゃならない」と思いますが、心の底に、「自分は成績がわるいのである、頭がわるいのである、よくできないのである」という強い信念がその子供の潜在意識に強く印象しておりますから、勉強しようと思っても

勉強に興味が起こらないのであります。それをいやいや「できないできない」と思いながら勉強しましても、本当にその勉強が心に這入らない、そのため、いくら勉強しても、その効果があがらないということになるのであります。これが言葉の力であります。

（『生命の真相』頭注版第30巻6〜7頁）

### わが子を褒めましょう

言葉は種子を蒔く。それは必ず芽を出して実を結ぶのである。家庭から（中略）罵りの声が絶えない限りは、かかる家庭で育てられた子供が生長して造り上げた社会が善くならないのは当然の事である。種子は、遙かの幼時に蒔かれている。詳しくいえば幼児以前の胎教に於ても蒔かれている。胎教以前にその魂の前身の経験や、祖先の遺伝の種子もあるのである。因果はめぐる、だから吾々はこれらの悪い種子の力を奪ってしまつたために反対の種類の種子を蒔かなければならないのである。そ

れは賞讃の種子である。讃嘆の種子である。如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる！」「きつと偉い人物になる！」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良化して行くことは吾々の為し得る、否為さねばならない義務であるのだ。（中略）

諸君よ、吾々が毎日必ず子供の心に対して「この馬鹿者奴が！」とか「貴様は実に不良だ！」とか始終罵声をあげせかけることによって子供の心に「悪い種子」を蒔いてさえも、尚それほどに実際に馬鹿者が出現せず、不良が出現しないのは何故であるか。これこそ実に強く神から譲られた「神性の遺伝」が吾々にはたらいていくれる証拠であるのである。吾々はこの「神性の遺伝」に敬礼し、感謝し、日夜この神性に対して讃嘆の声を雨ふらさなくてはならないのである。

（新編『生命の真相』第22巻167〜169頁）